

エラスムスにおける幼児教育論について

On the Preschool Education Theory in Erasmus

笠井 哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2009年9月7日受理)

Scholar of humanism Erasmus is known for the author of *The Folly God Appreciation* as the clergyman who planned a free will dispute against Reformer Martin Luther. The purpose of this paper is to consider the preschool education theory in Erasmus. According to Erasmus, the human being is existence to take education, and education of the childhood is important. Parents should achieve duties, and teachers should play their part enough. In addition, I insist that Erasmus should introduce the play and fun into learning of the childhood.

Key words: Erasmus, Preschool Education, play, learning

1. はじめに

エラスムス(1469~1536)は、15~16世紀を代表する人文主義者である。日本において、彼は『愚神礼賛』の著者として、あるいは宗教改革者ルターとの間で自由意志論争を企てた聖職者として、紹介されている。

エラスムスは、1469年10月27日にオランダのロッテルダムでホワダの聖職者の父と、医師の娘である母との間に生まれた。聖職者を父とした彼は、合法的な子どもとしては認められなかったという。

本稿の目的は、エラスムスがどのように幼児期における教育の重要性について説いていたのか、を考察することである。彼の『子どもたちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生から直ちに行なう、ということについての主張』(以下『主張』と略す)という書を中心に、『子どもの礼儀作法についての覚書』(以下『覚書』略す)をも参照して¹⁾、人間観と教育構想を明らかにしたい。

2. 人間は教育を受ける存在である

エラスムスの著作は、いずれも教育的な意味合いをもった内容である。著作によっては、その教育対象が君主であったり、王子であったり、学問を志している若者であったり、結婚を前にした若き女や若き男であったり、また迷えるキリスト教徒であったりもする。

「エラスムスの全生涯の活動は優れて教育的なものだった」²⁾といえる。

エラスムスは、『主張』を直接的には王侯の子どもの教育のために書き上げたのであるが、教育に関しての彼の考察の根底には、教育の対象として『主張』の読者層である上流市民の子弟をも含んでいたと見なした方がよいであろう。

エラスムスは、子ども時代における教育の重要性や必要性を説いている。キリスト教徒としてのエラスムスは、神との関係において、人間存在を「教育を受ける存在」と規定する。エラスムスは「獣という被造物は彼等に特有の機能を保持する手段を、全てのものの母である自然から与えられています。ところが、神様の摂理におきましては、全ての被造物の中で人間だけに理性の力が授けられており、そして足りない部分を補うために、教授というものが人間にはあるのです」³⁾と説明して、人間存在における教育の不可欠性を説く。言い換えると、人間存在は生き抜くための属性を何も持たずに生まれてくる、弱い存在であるのであるが、その代わりとして、人間存在には教育というものが神から付与されている、と彼は論ずるのである。エラスムスによれば、人間の精神は教育されることによって本来の人間になるものであるし、またその教育が最高に優れたものであるならば、「神の似姿にも近

づける」⁴⁾のである。

こうしてエラスムスは、「神の似姿に近づけるもの」として、人間には教育が重要なものであることを指摘した⁵⁾。では、どのような人間に向けて、子どもを育成すべきであると考えていたのだろうか。彼は、「親の誉れや利益となり、家内の財産の世話の責任を任せることのできるご子息」⁶⁾とか、「家族の信頼すべき保護者となり、妻と良き夫婦関係を持ち、国家に役立つ勇ましい有用な市民となるご子息」⁷⁾を持つためには教育が必要であると論じている。エラスムスは、親の希望や期待に応える子どもを形成するためには優れた教育が必要である、というのである。

エラスムスは、子どもを形成するための課題について、『覚書』に次のように挙げている。「第一には、最も重要なことなのですが、柔らかき魂に敬虔の種子を植え込むことです。次には、自由学芸を愛好させて、自由学芸を徹底的に学ばせることです。第三には、人生の義務を教えることです。第四には、生まれたばかりの頃から、初歩的な礼儀作法にしっかりと慣れさせることです」⁸⁾。そしてエラスムスは、教育の重要性を親に気づかせることを目的としている。

3. 幼少期の教育の重要性

『主張』において、エラスムスは幼少期を次のように捉えている。幼少期とは、基礎を学習する時期、記憶力に特に優れた時期、柔軟で従順な精神の時期、悪徳の性質の方に傾きやすい時期、また悪徳の棘が繁殖して完全に絡みつく時期である。

幼少期は、記憶力が特に優れた時期であり、またその記憶力のよさは良き知識や習慣や作法の習得ばかりか、自身の周囲にある悪徳や悪習をも、直ちに吸収してしまう。それゆえに、悪徳や悪習で満ち溢れた社会の中に子どもたちが放置されてしまうと、子どもたちは、その生まれもつての優れた記憶の吸収力のせいで、その悪徳や悪習を容易にかつ直ちに吸収してしまうことになる。つまり、悪徳や悪習で汚れた人々の中に放置されて来た子どもは、生まれもつての模倣という傾向によって幼少の頃から彼らの悪習や悪徳で汚されてしまつて、遂には墮落した人間に形成されていくことになるのである。人生の最初の学習内容がその後の人生のすべての期間において重要な要因となる。

また、エラスムスは『主張』において、子どもを悪習や悪徳から守るために次のように考えた。子どもが

悪習や悪徳を習得する前に、子どもの将来に責任を持つ者が悪習や悪徳を吸収しないための有効な手段や対策を講じなければならない。悪習や悪徳に対する手段や対策とは、未だ何の悪徳にも染まっていない幼少期の子どもに最良の環境と教育とを与えることである。そのような環境条件や教育が用意されることによって、子どもは最良の習慣や知識に慣れ親しむことになり、墮落した悪習や悪徳を詰め込む代わりに良き習慣や良き言葉や良き知識を習得するようになるのである。そして、習得した良き習慣や良き知識がさらにその後その子どもを守る武器とも防具ともなるのである。

また、先述した「足りない部分を補うために教授というものが人間にはある」という件であるが、ここには「人間は教育を受ける存在である」ということと、「人間は教育をその子どもに行う存在である」という二つの意味が内在している。つまり、エラスムスは、人間は「教育を受ける存在」であるとともに「教育を行う存在」でもあると論じている。そしてそれは神に対しての義務でもあり責任でもあるという。

「どの点においても、従順で追従する素材を最良の状態に形づくるのが、人間の責任なのです」⁹⁾、また「良習と学識の教育をそれぞれの近親者に与えることは、何よりも優先する敬虔な義務を遂行することである」¹⁰⁾と述べて、エラスムスは「教育を行う」ということは、人間の神に対する敬虔な義務あるいは責任であると説く。すなわち。子どもというものは単なる親の私的な所有物ではなくて、神からの授かりものとしての子どもに対して、最良の教育を行うということは、神に対しての義務や責任を忠実に遂行するということでもあった。それは、人間存在として当然に行うべきことであつた。

エラスムスは、「真の父親」とか「真の母親」という親としての義務や責任について論じている。彼は、「品位のある規律によって、子どもの精神を洗練することをしない父親は、辛うじて半分くらいの父親であるのです」¹¹⁾、また「子どもを産みはするけれども教育をしない母親は、辛うじて半分くらいの母親であるのです」¹²⁾と述べて、子どもを授けられた父や母は自分たちの子どもに、最良の教育を施すことによって、「真の父親」や「真の母親」になることができるというのである。そしてまた彼は、親が子どもに最良の教育を与えることは、祖国に対しての義務でもあると考

えていた¹³⁾。

4. 親の義務と教師の役割

エラスムスは、親の義務を次のように主張する。親は、「真の親」として親の義務と責任を十全に果たすためには、十分な配慮を行うべきである。素質を生まれた後の子どもに付与することは誰にもできない。しかし配慮の方法によっては、親は何らかの影響力を子どもに及ぼすことができる。第一の配慮として、身体と精神とが非常に密接な関係にあることから、「夫は良き家に生まれて、適切な教育を受けており、さらに健康に恵まれた身体を持っている、良き妻を選び取る」¹⁴⁾が考えられる。

第二の配慮として、ある種の密やかな感染で夫のその時の状態が子どもに移されていくことあがるので、「夫は、感情が乱れてない時や酩酊していない時に子どもをつくるための生殖の行為を行うべきである」¹⁵⁾。

第三の配慮として、「子どもは母親の乳房によって養育されるべきである」¹⁶⁾のだが、それができない場合には「健康な身体を有して、清らかな乳を出す、有徳の習慣を持つ乳母を選び取るべきです」¹⁷⁾。

第四の配慮として、「しっかりと選び出された教師に子どもは速やかに委ねられるべきである」¹⁸⁾。

中でも第四の配慮は重要なことであった。エラスムスは、この第四の配慮については以下のような主張を行っている。親の教育の義務の一つとして、親の子どもへの直接的な教育がある。しかしながら、何らかの理由があって、親が直接的に子どもの教育をできない場合もあるのであろう。その場合には、親は有徳で優れた教師や乳母を雇って、彼らに自分の子どもの教育を委託することが考えられる。親が自身の子どもの教育を第三者に委託する場合には、その親は教育を委託する養育者や教育者を、細心の注意を払って選択する必要がある。子どもの教育が第三者に委託される場合には、子どもの教育は養育者と教師との間で分担されて行われるものである。養育者は「身体面に最適の刺激を与える」¹⁹⁾という役割を担い、教師は「教養を習熟させて有益な見識と、最上の高貴さを持つ精神をつくる」²⁰⁾という役割を担うべきである。

親は、養育係や教師の雇用の選択に際しては、世評や伝聞に頼ることなく、自分の精神と眼で養育係や教師の人格や品格を観察して、優れた養育係や教師を雇い入れるべきである。子どもを教育する教師を親が選

択する場合には、慎重にまた金を惜しまずに選択することが大事である。雇い入れた後にも、親は教師や子どもをその眼差しの下において、十分に監視せねばならない。

エラスムスは、『主張』において彼自身の子ども時代の学校体験を振り返りつつ、学校教師を激しく批判して、次のように論ずる。学校教師は、家庭から学校に学問を学ぶために入学してきた子どもを、人間として取り扱うことはしないで、その子どもに喜びを持って残忍なまでに行う体罰の対象としている。ある学校教師は、体罰を好んで行うために、全く無実の子どもに罪を捏造さえている。また、公の学校では、先輩たちが新入生に対して、野蛮で汚らわしい迎え入れの儀式を執り行っており、それを学校教師は見て見ぬふりをして許可を与えている。学校教師は、貪欲なまでに自分の報酬のことばかり考えているのだが、生徒の育成ということには全く考えを巡らしてはいない。学校が、「学校ではなく、拷問部屋なのだ」²¹⁾といわれるほどであり、「その側においては、鞭の音の響きとか、鞭打ちの音の響きとか、泣き叫ぶ声やすすり泣きの声とか、嫌悪すべき彼らの脅かしの声しか聞こえてこないのです」²²⁾。

エラスムスの『主張』においては、このような種類の学校教師や学校に対して、批判を激しく行うばかりで、学校教師や学校教育について積極的に肯定する叙述が行われていない。これはいかなる理由からであろうか。その理由は、エラスムス自身が悲惨で苦痛に満ちた学校体験をしているからであると考えられる。または、王侯や貴族や裕福な市民の子どもたちを対象に、『主張』を記したことに由来するからであろう。

『主張』においては、エラスムスは、子どもを教育することを王や貴族や裕福な市民の親に対して、奨励することを念頭においていたこともあって、家庭教育や家庭教師を中心にして議論を進めている。これは、エラスムス自身も家庭教師をした経験があるので、それを生かしているからであるとも考えることもできる。それでは、エラスムスは、どのような人を良い教師であると考えていたのであろうか。彼は、望むべき教師について、次のように論じている。

教師を務める人間は、「文学的教養や上品さを備えた人間」²³⁾とか「学識深く有徳で思慮深い教師」²⁴⁾というように知的・道徳的に陶冶された人間でなければならない。また、体罰や脅しなどの恐怖を用いて幼

少期の子どもを教育することは、否定されるべきことであって、「幼い子どもには、過酷な扱いによって子どもを怯えさせるような教師ではなく、優しい扱いによって、子どもを魅惑して引き付ける教師をあてがうべき」²⁵⁾である。教師は、「父の情愛という精神の誘い」²⁶⁾を採用して情愛をもって子どもに接するべきであり、このような教師と子どもとの間柄の中で、子どもの側に自ずと生ずる教師への敬意によって、子どもを引き付けるというやり方で教育を行うべきである。というのは、特に幼少期の子どもは「教師を好きになって後に勉学に従うようになる」²⁷⁾からである。そのためには、教師は子どもが恐がったり嫌がったりするような表情をとらないで、顔つきも柔和にしておくべきである²⁸⁾。

このように、エラスムスは、学識を有し、上品な振舞いを身につけ、道徳的に優れた人格で、愛情豊で自身の感情を統制することのできる人間が教育に携わる者である、と主張したのである。

5. 幼少期の学習と教育方法

エラスムスは、「幼少期の子どもに学習させることは酷である」と主張することで教育に反対する人々に対して、幼少期の子どもこそ学習に向いており、幼少期の子どもは学習の辛苦や困難さというものを、ほとんど感じていないと反論している。エラスムスは、このことを人間の自然の傾向として、次のように説明する。

幼少期の子どもは、辛苦や困難さを感じるどころか、「成人した者が、知識を獲得するために必要としているものを、幼少の時期に独特の自然の傾向によって子どもは熱心に自ら進んで、ある時は容易、またある時は苦もなくしっかりと習得します」²⁹⁾。人生のそれぞれの時期には特徴づけられる傾向があるのだが、幼少期には幼少の時期に独自の自然の傾向がある。その自然の傾向とは、子どもが自然の模倣の欲求を持っていることに現われている。つまり、子どもは模倣を自然のうちに行うという傾向を持っているのである。また、「模倣することを好む」という自然の傾向には非常に優れた粘着性のある記憶力が、付与されているのである。そして、学習というものは、6歳とか7歳から改まって始めるものではなくて、事実上はすでに生まれた時から始まっているのである。幼少期の子どもは、自分の周りにいる人々から喋り方などの言語の習得

を着々と行っている。特に、最初の三年間はたいへんに重要な時期である。母親に情愛深く抱かれて、母親の語りかける言葉を聞き覚えるという意味において、子どもにとっては母の胸が最初の学校となる³⁰⁾。

このように、エラスムスは幼少期には優れた記憶力によって何でも吸収するということを指摘する。しかしながら、幼少期の子どもは吸収する事柄に関しては何らの選択をすることなく、何でも吸収してしまう。幼少期の子どもは、善なる言葉や事柄だけを選択して学習・吸収・記憶するのではないのである。幼少期の子どもは、自分の身近にあるものを学習の対象とするのだが、学習・吸収・記憶する内容の善悪については全く判断や区別をしていないのである。それゆえに、幼少期においては、悪習や悪徳までもが容易に吸収されることになるのである。もしも悪習や悪徳に染まらない人間を形成しようということであるならば、幼少の頃から悪しき知識や事柄を学習させてはいけない。そのためには悪習や悪徳をすでに吸収して、悪習や悪徳に染まってしまっている乳母や教師を子どもの周りに配置してはいけないし、親も自身の行いや振舞いに気を付けなければいけない。エラスムスは、このような配慮に加えて、さらに積極的に「模倣することを好む」という自然の傾向を学習に役立てて、子どもが模倣すべき模範的なものを与えておくべきであると考えている。つまり、子どもが吸収すべき知識や事柄を親とか教師とか周りにいる大人たちとかが選択して整備するということである。

このようにエラスムスは、子どもに模倣されてもよい言葉遣いや習慣を、模範的なものとして子どもに与えることを提案していたのである。それでは、エラスムスは具体的・実際的には何をどのような方法で子どもに与えたらよいと考えていたのであろうか。言い換えるならば、幼少期の子どもは一体何をどのように学ばばよいというのであろうか。エラスムスは、幼少期の子どもが学ぶべきものは「文学の基礎的なこと」、「言語の熟練」、「散文や寓話的作詩法」などを構想していた³¹⁾。さらに向学心のある子どもには、ある論題について論ずることや、ラテン語からギリシア語への翻訳を、またその逆にギリシア語からラテン語への翻訳とかを、また地誌学を学習させることを勧めている³²⁾。これらのことから判断すれば、エラスムスにあっては、幼少期においても学習の中心は言葉や文体の習得であった。

エラスムスは、教師の仕事として学習の題材の選択と提示方法に十分な配慮を払うことを挙げている。教師は、「子どもの眼に最も好ましく、最も親しみやすく愛すべきもの」³³⁾を選択して、上手に工夫して子どもに提示しなければならない。また、その季節に応じたものを取り上げるとよい。エラスムスは、提示方法あるいは教授方法として、教師の工夫が必要であるとして、その工夫の仕方の提案の一つとして「図絵化」を取り上げている。つまり、エラスムスは、幼少期の子ども教育のためには、寓話などの物語の内容を図絵化して明示的に示すことを提案しているのである。例えば、樹木や草木や生物の名前とか特徴について図絵を使用して説明して教える。さらに、それらのものの加工とか加工品についてのことも教えることを、勧めている³⁴⁾。このような図絵化の発想は、後の時代のカンパネラ『太陽の都』やコメニウス『世界図絵』においても見られる。

別の例として、エラスムスは古代の作家によって提出された事例を紹介している³⁵⁾。子どもが好物としている菓子を作る際に、文字の形をした菓子を作り上げて、その文字の名を子どもに答えさせる。正解の場合には、子どもに褒美としてその文字菓子を食することを許す。また、文字菓子だけでなく、象牙で文字の形を作って、その文字形をおもちゃにして子どもに遊ばせたりもする。

またエラスムスは、弓と的を使った事例として、弓を好む子どもに対しては、称賛と恥辱とを用いながら、文字の学習を行わせる例を紹介している。的には文字板を置くのだが、最初はギリシア語の文字板を置いて弓を引かせる。その次にはラテン語の文字板を置いて弓を引かせる。それぞれの的に当てたり、その文字の名を発音したりした時には、拍手に添えて子どもが喜びそうな菓子を褒美として与える。二人か三人の競争仲間がいれば、勝利への欲望や不名誉への恐れなどが生まれて、その効果はさらに大きいものとなる。幼少期の子どもには、勝利への欲求や羨望などが植え付けられており、競争において勝利を収めるために子どもは注意深くなるし、またやる気をさらに出すことにもなる。エラスムスは、このように称賛や恥辱や競争という手段によれば、鞭とか脅迫とか罵詈雑言とかは用いなくても済む、と主張している。なお、分別がついて来た頃には、訓戒とか懇願という手段も使うことになる。

エラスムスは、幼少期の子どもを教育する場合には、大人とは違った配慮が必要であると論じている。彼は「一度にではなく、また過度にでもなく、ゆっくりとそして間隔を置いて与えられますと、子どもはその不快さを容易に克服することになる」³⁶⁾として、子どもに学習の不快さや辛苦を感じさせないために、少しずつの学習を主張している。そしてエラスムスは、「子どもには力強さがあるのではなくて、粘り強さがあり、自然のうちに存する熟練があるのです」³⁷⁾として、疲労を知らない子どもの持続的な力や活発さに、基づいた学習の仕方を主張している。

6. 遊び戯れの導入—おわりにかえて—

また、エラスムスは、遊び戯れや面白い話や格言を積極的に学習活動に導入することを主張している。彼は、ほぼ次のように主張する。

教師は、学習の中で生ずる緊張や困難さや辛さや倦厭を克服するために学習の中に遊び戯れを導入して、ある種の魅惑を味付けするべきである。というのは、「遊び戯れと子ども時代とは類縁的なものであり、また子どもはその行いを辛苦としてではなく、遊び戯れであると思っている」³⁸⁾からである。それは、「有益さは楽しさの仲間であり、また誠実さはユーモアと深い関係にある」³⁹⁾からである。このような学習環境において、子どもは学習に伴う不快感を感じることができないままに、学習を進めて行くことができるようになる。「詩人の面白いおとぎ話や機知に富む格言や役者の気の利いた言葉や教養的な寓話」⁴⁰⁾は好ましい学習材料である。例えば、アイソポスなどの寓話を読むことによって、子どもは滑稽さを通して真面目な哲学の訓戒を学んでいるのである。喜劇は道徳の本質を表したものであるので、このような種類の遊び戯れを通して非常に多くの哲学的な事柄や名称を、子どもや初学者は容易に学ぶことができるのである。このような好ましい学習題材を子どもの学習環境として、教師は用意するべきである。巷には、好ましくない学習題材が溢れている。愚かで低俗でおどけた歌や、作り話とか愚かな空想や妄想に満ちた物語や、ふしだらな表現を含む低俗な物語とか俗謡などは、否定されるべきもので、子どもには与えてはいけない。

このように、エラスムスは古代の人々が採用した学習方法に基づいて、学習の内容や方法について言及しているのだが、このような学習方法によってすべての

子どもに、特定の学問を強制的に教え込めるとは見ていない。そもそも学習とは、人間本来の自然に合致するものであり、学習方法は人間の自然に合致するべきものでなければならないとエラスムスは考えている。彼は、素質、学習、練習という三つの事柄を挙げて、学習者の生まれ持ったの資質や、自然にそって初歩的なものから順を踏んで教えることや、繰り返しの習得を論じているのである。エラスムスは、学習者の素質や意向を無視して成立する学習方法を、考えてはいないと判断した方がよいであろう。

またエラスムスは、「しかし、全てのことの中で最も大事なことをよく考えてみますと、それは、子どもが教師を敬愛して畏敬し、学問を愛し尊び、不名誉を恐れて、称賛を求めることを習慣づけられることでもあります」⁴¹⁾として、子どもが学習の主体となることを主張しており、子どもに一方的な学習活動を強要することを迫ってはいない。むしろ、エラスムスは子どもの自発的な意志に基づいた学習というものを、構想している、と判断する方がよいように思われる。

文 献

- 1) テキストは、D・エラスムス：エラスムスの教育論，中城進訳（二瓶社，1994）により、その頁数を記す。
- 2) 上智大学中世思想研究所編，ルネサンスの教育思想（上），p. 360（東洋館出版社，1985）
- 3) p. 15
- 4) p. 13
- 5) エラスムスには、「本来的に性善説の傾向があったものと思われる」といわれている。
月村辰雄：エラスムス，伊藤博明編：哲学の歴史 第4巻 ルネサンス【15-16世紀】，p. 337（中央公論新社，2007）所収。
- 6) p. 17
- 7) p. 18
- 8) p. 148
- 9) p. 25
- 10) p. 60
- 11) p. 22
- 12) 同前。
- 13) p. 27 参照。
- 14) p. 45
- 15) 同前。
- 16) 同前。
- 17) p. 46
- 18) 同前。
- 19) p. 11
- 20) 同前。
- 21) p. 68
- 22) 同前。
- 23) p. 63
- 24) p. 109
- 25) p. 8
- 26) p. 87
- 27) p. 66
- 28) p. 66 参照。
- 29) p. 7
- 30) p. 56 参照。
- 31) エラスムスは、当時のラテン語教育に最も欠けていた、「子供の成長に応じた段階的な教育を重視」している。
二宮敬：エラスムス，p. 382（講談社，1984）
- 32) p. 103 参照。
- 33) p. 94
- 34) p. 93 参照。
- 35) p. 97 参照。
- 36) p. 102
- 37) 同前。
- 38) 同前。
- 39) p. 95
- 40) 同前。
- 41) p. 103